

記号接地問題のパーズ記号論的再定式化 ——可訂正性・動的対象・応答遮断

伴野 崇生（慶應義塾大学）

発表要旨：

本発表では、記号接地問題をパーズ（Peirce）の記号論の観点から再定式化を試みる。従来、記号接地問題は、形式的記号体系における記号がいかに対象と結びつくかという問題として理解されてきた。Harnad(1990)は、記号が記号によってのみ定義される閉じた体系では意味が成立しないと指摘し、感覚的弁別やカテゴリー化への接続を接地の条件とした。これに対し本発表では、接地を記号と対象の静的対応ではなく、記号使用が誤りうること、そしてその誤りが訂正されうることに注目して捉え直す。

本発表の中心的な命題は、記号接地とは、記号使用が動的対象の抵抗と他者の問い返しにさらされ、その誤用を露呈させられ、解釈習慣を修正しうる過程である、というものである。パーズの記号論においては、記号は記号・対象・解釈項の三項関係として成立する。また、対象は記号によってその時点で表される直接対象と、記号過程を駆動しつつ常に表象を超過する動的対象とに区別される。以上を踏まえると、記号が接地されるとは、直接対象としての定義に閉じるのではなく、動的対象の抵抗によって解釈項、すなわち理解・判断・行為傾向・習慣が修正されうることであり、と考えられるというのが本発表の立場である。

この観点から、さらに本発表は接地の条件を、予期、破綻、修正、対話の四側面に整理する。記号は何らかの予期を生み、その予期は身体的・行為的・社会的・制度的・形式的な抵抗領域によって破綻しうる。その破綻が以後の解釈や行為を修正する理由として働くとき、記号使用は接地されていると言える。さらに（人間的な）記号使用においては、訂正は孤立した個体と世界の関係だけでなく、他者からの問い返し、理由要求、共同体的検証を通じて成立する。この性質を、本発表では「対話的可訂正性」と呼びたい。

また接地の反対概念として、本発表は「応答遮断」を提案する。これは、記号使用が動的対象の抵抗や他者の問い返しから閉ざされ、自己の体系内部でのみ正当化される状態を指すものとして提案するものである。たとえば、反例を無視する知覚的閉鎖、他者の傷つきを退ける社会的閉鎖、制度内部の定義だけを優先する制度的閉鎖、理論内部の整合性だけを守る理論的閉鎖がこれにあたる。赤信号、署名、侮辱的呼称の事例分析を通じて、本発表は、記号の意味が単なる対応ではなく、誤用の露呈と習慣修正の過程において成立することを示す。以上を踏まえて最終的に、記号接地とは、記号が世界を写すことではなく、可訂正的な記号作用の網の目に参加することであるとの結論へと向かう。

主な参考文献：Harnad, Stevan. “The Symbol Grounding Problem.” *Physica D: Nonlinear Phenomena*, 42, no. 1–3, 1990, pp. 335–346. / Peirce, Charles Sanders. *The Essential Peirce: Selected Philosophical Writings, Volume 2 (1893–1913)*. Edited by the Peirce Edition Project. Indiana University Press, 1998. / 谷口忠大編『記号創発システム論——来るべき AI 共生社会の「意味」理解にむけて』新曜社、2024 年。